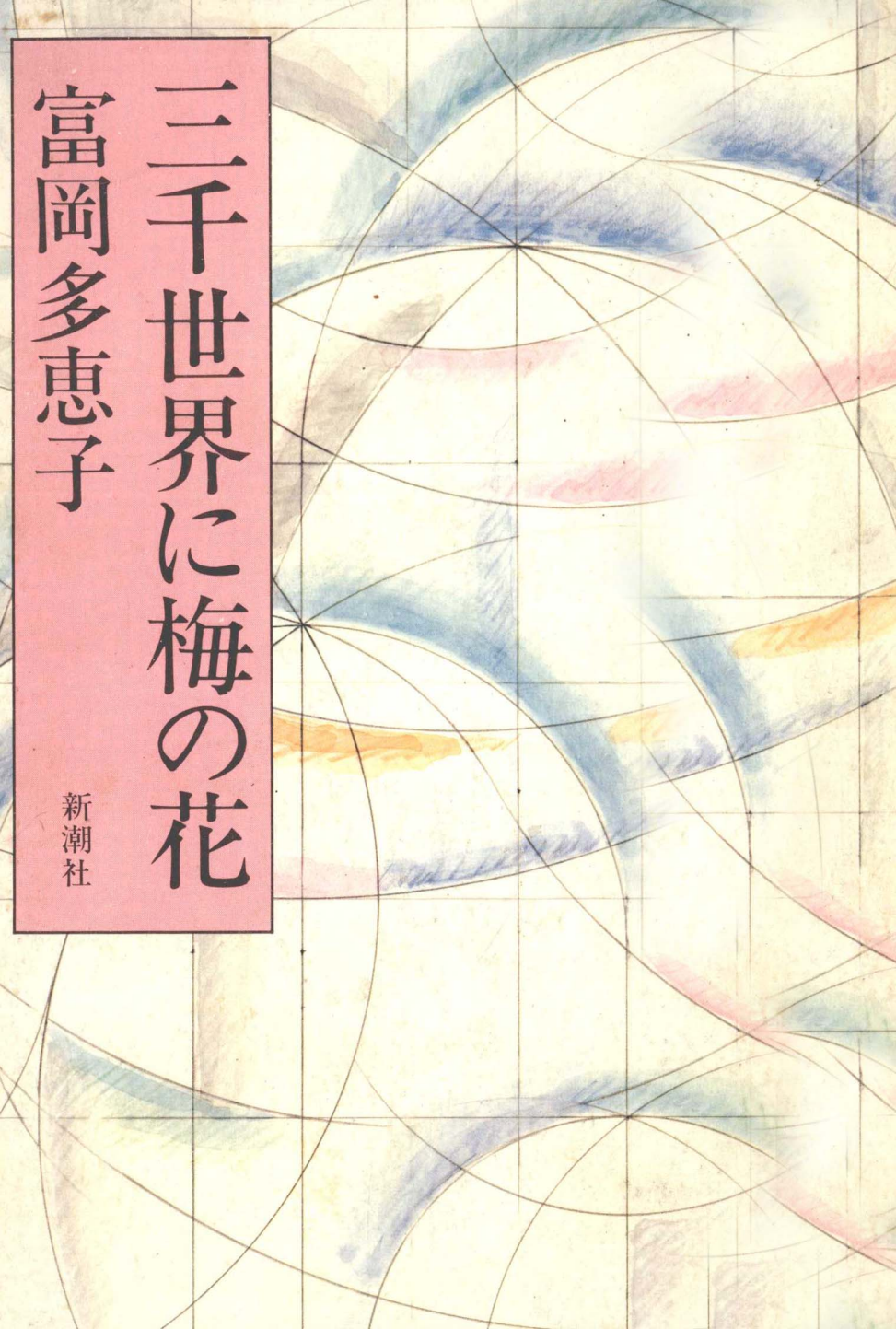


The background of the entire page is a complex geometric pattern of thin, dark lines forming a series of overlapping circles and arcs, creating a grid-like structure. Overlaid on this pattern are broad, soft washes of color in shades of blue, pink, and yellow, which appear to be applied with a brush or pastel, giving the background a textured, artistic feel.

三千世界に梅の花

富岡多恵子

新潮社

三千世界に梅の花

富岡多恵子

新潮社

さんぜんせい
三千世界に梅の花 はな

一九八〇年九月一五日 印刷

一九八〇年九月二〇日 発行

著者 富岡多恵子 とみおか たえこ

発行者 佐藤亮一 さとう しょういち

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03—二六六—五一一一

(編集部) 03—二六六—五四一一

振替東京四—八〇八

印刷 株式会社金羊社

製本 大口製本株式会社

定価 九八〇円



© Taeko Tomioka,
1980, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

三千世界に梅の花……………5

この世が花……………85

装帧
高松次郎

三千世界に梅の花

三千世界に梅の花

奈於^{なみ}は、五十七歳になるまで黙って暮してきた。

生れる前から、奈於は声をとめられようとしていた。母親が、腹の子を滅^{へし}児するつもりでいたのである。

母親に滅児の覚悟をさせていたのは、その年が大飢饉の年だったということもあった。春の四月から秋の九月まで、土用にほんの数日照っただけで雨が降りつづき、寒い夏であった。米も麦も育たず、綿の木は実がならないのだった。山野にはえる食べられる草や実はことごとく人間に食べつくされた。ひとは木の皮さえ食べた。

その上に、奈於が生まれようとするころ、親は家財、家屋敷、貸家も売払って逼塞^{ひつそく}していた。祖父は苗字帯刀を許された藩の御上大工であり、そのころは大きな家だった。ところが奈於の父親の代には、同じ大工でも没落してしまっていた。奈於は、嫁に滅児を許さなかった祖母のおかげでこの世にあらわれ出ることができた。しかし、七歳の時には父親はすでに大工でなくなり、甘酒の行商をはじめ、母親は糸ひきをして稼いでいた。暮しは下

を向いてころがり落ちていた。それが、父親の死で決定的になった。奈於が九歳の時に父親は死んだのだった。母親は病身であった。

「後家の子だとうしろ指さされるようなことはしてくるな」と父親の死後いつも母親は子供らにいていた。

奈於は母親を困らせるようなことはどんなささいなこともしなかった。幼いころ父親の折檻せがんから自分を救い出し、抱きしめてくれた母親の腕や胸のぬくもりの記憶が、かすかに、なまあたかく呼びもどされるのだった。父親はいつも酒を飲み、たいてい機嫌が悪く、大声をあげては妻や子をなぐることもたびたびであった。まだ幼い三ツか四ツの奈於を簀す巻まきにして、裏庭の雪の上に放り出したことさえあった。その時立ちふさがる夫を押しのけて母親が雪の中から奈於を助けた。また、四ツか五ツくらいの時、父親は奈於に酒を買ってこいといいつけたが、いつまでたっても奈於は帰ってこない。忘れたところに、幼児は手ぶらで帰ってきた。途中で近所の子供たちに誘われて遊んでいるうちに酒を買うのを忘れたのだった。酒を待ちこがれていた男は怒り狂い、幼児を蒲団で包み、そのまま狭い押入れに押しこめて戸を閉めた。幼児は泣き声を出せなかった。その時も、母親が奈於を助け出し、そのために自身は裏庭へ引き出されて、思い切り夫に打擲うちなされた。幼児はそれを見ていた。しかし、この父親は、酒ぐらいしかその時の困窮と失ってしまった家及び地位、信用についての残念と屈辱を忘れる術はないのだった。幼い子供にそれはわからなかった。また子供の母親も、ただ耐え忍び、夫に従うだけであり、もとより、夫が仕事を失い、家

が、道具が、なくなっていく原因を見きわめ、夫を上手に方向転換させる才覚などもちあわせていたのであった。おそらく、急速に零落していったその大工は、父親が腕のたしかさはいうに及ばず、人柄、生活態度に於ても職人階級の模範だったゆえにひとからの信頼厚く、大きな家屋敷にも住めたそのやり方を繰り返すことができなかった。父親の生活を繰り返すために必要な、大工としての修業が足りていなかった。というのは、早くに母親を失って継母に育てられたこともあって父親の不憫^びがかかり、職人としての技術、生活の規律を覚えるべき年齢にその機会を逸していた。こうして、奈於の父親である大工は、親の築いたものをごとく失い、ゴクドー者となって一生を終った。

奈於には、父親は常に暴力であった。十歳にならぬ子供に零落した男の心情を想像する能力はなかった。父親という暴力に対して、母親はそこから救ってくれる人間であった。その母親は、いつも黙って耐えているだけであった。大声をあげて、父親の暴力に抵抗しさからう母親を、奈於は見たことがなかった。奈於の耳に響いているのは、父親のどなる声やいらだつ声だけだった。父親のたてる声は、家族の沈黙に吸いこまれて、はねかえることはなかった。これがまた、落ちてゆかねばならぬ男をさらにいらだたせた。しかし、とにかく、一家の暴力である父親は奈於が九歳の時に死んだ。

奈於は奉公に出た。当然年季奉公である。一年の年季の給金をもらい、節季には衣服をもらった。給金は勿論のこと、自分が着るためにもらう衣類さえ、奈於は母親に渡した。節季にもらう衣類はひとえの着物とか浴衣であった。最初の奉公先では、子守り、掃除、

使い走りの雑用等をし、夜は夜で糸つなぎ、銭つなぎ、をさせられた。次の奉公先の仕立屋では、夜おそく奉公人の奈於に仕立物をとどけさせることもしばしばあった。奈於は子供としての待遇を受けていなかった。九ツや十の子供でも雇う方にとっては奉公人は奉公人であった。奈於は字が読めなかったから、いわれたことはアタマで覚えるしかなかった。仕立物のとどけ先の名前も、仕立物の名前も、それを記した文字は読めなかった。次の奉公先の、饅頭屋まんじゅうやでも同様だった。菓子の名も、値段も符牒もいわれたコトバで覚えた。

奈於は働くことを、つらいとも苦しいとも思わなかった。母親が病身であり、妹がいる。後家の子だとうしろ指さされてはならぬ、という母親のいいつけを守らねばならないのである。なんといっても、奈於にとって母親は唯一の味方であり唯一の手本であった。父親が暴力であり家をつぶした悪人であったとしたら、母親はそれに耐えて自分を救ってくれた人間だった。その母親のようにつつましく耐え忍んで働くことでしか、母親の救いに応えることはできなかった。

子供の生活を知らぬ奈於は、また子供のように存分にねむったこともなかった。夜おそく、目を閉じたと思うと、もう朝起されていた。暗いうちから、あてがわれる粥かゆをかきこみ、もう水仕事をしていた。奈於は、主人が見ていないところでも、いわれたことはそれ以上に、まちがいなく仕事をした。少しでも仕事を省略して楽をする算段はまったく働かなかった。かといって愚直なのではなかった。機転がきき、仕事は手早いのであった。いくらでも働いた。したがって雇い主からはいつも気に入られた。こうして十七歳まで奉公

先で奈於は働きつづけた。その間に、福知山ふちやま藩から三人の孝行娘のひとりとして表彰を受けた。自分の生き方が世間から認められ肯定されたという満足と誇りが、ひとりの少女に強い忍耐をさらに強制し、それがいずれ必ず認められ肯定されて、幸福につながっていくという自信を植えつけたにちがひなかった。

十七歳で家に帰った奈於に、しばらくすると縁談があった。ひとを介して、遠縁にあたる林助なる青年が、奈於と結婚したい旨伝えてきた。林助には、在所から福知山へ出て、なにか商売したいという気持があるのだということだった。福知山の商家で七年間奉公した奈於は、心が動いた。どの奉公先の主人も、奈於はいい所帯もちになるとほめていたのを誇らしく思い出し、また商売人の女房としてなら、という自信も奈於のどこかにかくされていた。ところが、そのひそやかな希望はかなえられずに、別の運命が奈於をさらっていった。

奈於の母親に由利という妹があった。この由利が綾部あやべの富裕な家に嫁いでいた。ところがその夫（といってもその男も子供のない先代の養子であったが）が死ぬと、子供のなかった由利は結婚する前に恋人だった男とつき合うようになり、そのことは当然、世間から良くいわれるはずがなかった。身内からもその行動は非難された。ことに由利の実家の長兄（奈於の母親の兄）と夫の家の本家筋にあたる男が、後家である由利の男出入りを非難するだけでなく、その弱みにつけこんで彼女の家の財産をとろうと企んでいた。

その由利から、奈於を養女にしたいと奈於の母親は頼まれていた。奈於は、林助のこと
もあって由利の家へいくことは気がすまなかったが、いくら先代のころから比べると財
産も減り、由利が後家になってからさらにそれが減っていたとはいえ、病弱の母を支えて
昼夜の区別なく働いている奈於の家とは生活の余裕は比ぶべくもなかった。また奈於は母
親のすすめをことわることはできぬ娘であったから、結局、十八歳の時由利の養女となっ
た。

奈於が由利の家へ入ったころ、叔母から養母となった由利は世間と親類縁者を向うにま
わして、いわば四面楚歌の中にいた。世間の非難はともかく、親類縁者からの非難は、財
産のある後家への陰湿な策謀をはらみ、ことに由利の長兄が、実の兄であるのに、いやそ
の立場を利用して由利を不利な立場に追いこむ先頭であった。いつもいつも、親類縁者が
出入りして、由利をとりかこんで、いざこざのたえることはなかった。由利が、養女の奈
於にその具体的な事情を話したとしても、どうにもならない。ひとりで苦しみに耐える由
利には、恋人が必要以上に浄化された。しかしついに、由利は恋人との関係を無理強いに
裂かれた。親類縁者の攻撃は、由利の恋人にも向けられたからだ。奈於は、いたたま
れなくなり、半年で実家へ帰ってしまった。そこはあまりにも奈於のそれまでの環境とは
異っていた。

養母由利と実母とは、姉妹でありながら、奈於にはまったく異った人格にうつった。養
母も実母も寡婦であるのに、一方は男のために苦しみ、また苦しめられており、片方はた

だ毎日の暮しのために苦しんでいた。といって、由利も決して派手な性格ではなかった。子供のいないまま、夫に先立たれ、家屋敷、田畑のある後家の立場で世間、親類につけ入るスキを見せずに家を守るしたかさと強さが、由利にはなかった。奈於の母親は、からだも弱かったが、生きていたころの夫に対しても生活に対しても弱さに於て徹底しており、それは由利にない強さであった。しかし、十八歳の奈於に、養母由利の女の孤独を理解する能力はなかった。

奈於が、実家に帰ってしばらく過ぎた或る日、由利が突然訪ねてきた。

「姉さん、わたしはもうひとりでもうにもならない。家屋敷も、田地田畑もあらかたとられてしまった。

奈於、帰ってきておくれ。帰ってきて、うちの跡を嗣いでもらわないと、先祖のまつりもできない。頼むよ、奈於。帰って、先祖まつりをしてやっておくれ」と由利はいった。

それでも奈於は由利のところに戻る決心がつかなかった。

「いちばんの悪人は兄さんだよ。わたしが男のために借金だらけだといふらしておきながら、それを内緒にしてやるからと、あれこれとゆすりとった。死んだら、必ず兄さんにとり憑いてやる」と由利はいったが、その異様な形相に奈於も母親もまるで生霊を見たように驚いたのだった。

「今に見ておれよ、きつとり憑いてドブへはめて、汚いドブネズミのようにしてやらぬと、気持がおさまらない」と由利は興奮して叫びながら飛び出していった。由利の声はう

わずって震えていた。忍耐の限度が、実の姉と養女の前でうち破られていた。

由利は福知山の奈於の家を飛び出すと綾部に戻ったが、途中で恋人の家の近辺をしばらくうろついていた。恋人は、由利の夫の方の親類縁者から由利とのつき合いを禁じられ、他所の土地へ消えていた。由利はそれを知らなかった。恋人の家から少し離れたところに立って、しばらくじっとその家を見つめていた。それから家に戻り、由利は井戸に身を投げた。

養母由利の自殺は奈於には強い衝撃だった。由利の自殺は、自分が実家へ帰ったのが直接の原因でないのは奈於にもわかっていた。少くともそれが第一の原因ではない。しかし、由利の男関係のもつれ、それがもたらした親類縁者間のいさかいの複雑な取引きは奈於に理解できないから、由利の自殺を知って自分の家出が重苦しくここにぶらさがった。別に由利を嫌って実家に戻ったのではない。それまで、子供の時からただひたすら母親のために奉公先の主人のいいつけを守って働いてきた孝行娘には、由利の家の状況はや、やこしいものでありすぎたのである。そこでは、奈於の努力、忍耐、それがつちかった能力の發揮されるところがなかった。まったく別の種類の努力、忍耐がそこでは必要であり、それ以上に、必要なものがあつたとしても奈於に想像のつくはずがないのであつた。十八歳になつたばかりの品行方正な孝行娘奈於に俗世間としたかに対峙して戦い、しかもあざやかに、あざとく俗物どもを斬りすて、追いはらう術のあろうはずはなかつた。それだから奈於は一方的に、自分の家出を由利の自殺の一部に結びつけ、悪事を働いた以上の後悔が